

『我身にたどる姫君』論

——同一姫君のすり換えを中心に——

大倉 比呂志

一

関白と皇后宮との密通によって生まれた我身姫(後に女院)の出生の秘密を隠蔽するために、我身姫は皇后宮の母親である故麗景殿女御の姉妹である尼上に引き取られて、音羽で暮らしているわけだが、「いかにしてありし行方をさぞとだに我が身にたどる契りなりけむ」(1・上・一一)の歌によって表象されているように、『我身にたどる姫君』は我身姫が曖昧模糊とした自分の出生に懊悩している状態から起筆されている。

その音羽を比叡山からの帰途、雨宿りに立ち寄った関白の息子三位中将(後に関白)は、水尾帝(後に水尾院)と皇后宮との娘である女三宮を恋慕してはいるものの、再度訪問した際、琴を弾いている女性(我身姫)を垣間見て、

- ①(水尾帝ノ娘ノ)女三宮の前裁見給ひシ夕べにつきはてにし魂の、なほ残りけるにや、ただ時の間に身も砕けぬる心地ぞする。(1・上・二四)
- ②さても誰ばかりならむ、この尼上は子ありとも聞かざりしものを、故中納言(注―尼上の夫)亡くてもそこら久しうなりにしを、こはいづくなりし人ぞと思

ふぞひたすら堪へがたき。(1・上・二五)

と語られているごとく、三位中将は我身姫に恋着してしまう。そこで、三位中将は我身姫のことを「かけかけしき筋にはあらず、推し当てにたづね聞こえ給」(1・上・二六)うたところ、尼上は、

③昔人(亡夫)の、思ひかけずかこつゆゑあるべき隈にもせしを、背き捨てし山の奥には、心苦しう思ひわづらはれながら、その形見にと生ほしたて侍りし」(1・上・二六―二七)

と虚偽の答弁をしたものの、尼上自身も我身姫の確たる素姓を知らず、不審を抱いているので、事実を知りたいと思っただ。と同時に、父関白も我身姫の誕生さえ知らず、皇后宮への手引きをした女房の内侍も不興を買って、死去してしまっているのである。

一方、好色者と評判の二宮(父―水尾帝、母―皇后宮。後に式部卿宮となるが、死去)は三位中将とは、光源氏と頭中将、匂宮と薫のごとく、親友かつライバルであるわけだが、

④この君達(三位中将)のいたうまめだちてあだなるところおはせぬを、いと心

やましうて、いかで深く思ひつつまむこと見あらはずわざをせむと、かげに
つき給へれば、ましてたび重なる音羽の里たづね給はざらむやは。(1・上・
三二)

とあるように、三位中将を尾行した結果、その行き先を突き止め、音羽に
赴くのである。そこで二宮は我身姫のもとに闖入し、口説くわけだが、そ
れに対して尼上が、

⑤「あが君や、今宵出でおはしましてを。ともかくも御心にたがひ侍らむ時なむ、
いみじからむあやまちにも思さるべき。さるゆゑ侍り」と、泣きぬばかり思
したるに、……(1・上・三四)

と二宮に嘆訴したために、ことなきを得るのである。この闖入事件を機に
最悪の状況になることを恐れて尼上が皇后宮に消息した結果、皇后宮は同
母兄妹による近親相姦を避けるべく、女房である宣旨の里に移居させる。
その心労のために病臥した皇后宮を見舞った関白は、今まで知らなかった
実の娘(我身姫)の世話を依頼され、皇后宮崩御直後に自邸に引き取るわ
けだが、尼上は我身姫が宣旨の里に移居した後、再訪した二宮に対して、
我身姫は夫の隠し子で、夫の死後、無聊を慰めるために引き取って暮らし
ていたと話し、さらに、二宮が初めて音羽を訪れた翌日、二宮から手紙も
なかった衝撃で、我身姫は女房とともに失踪したと嘘をつき、再訪した三
位中将もまた尼上から我身姫失踪の作り話を聞かされる。

だが、三位中将は父関白邸に引き取られた我身姫のもとを訪れたところ、
「あやしう見し心地する若人の見ゆるを、誰ならむと思しめぐらすに、か
の山里人なれば、いと心得ず、いとどたどらるる方そひて、さるべきつい

でつくり出」(2・上・七〇)して、「山里人」(注―我身姫付きの女房の侍従)
に以前声を聞いたことがあるような気がすると尋ねると、「ものいとよく
いひ続ける」侍従は次のように答える。

⑥「さも侍りけむ。承りし心地なんし侍る。音羽といふ所に、故権中納言の姫
君(注―我身姫のことだが、尼上の亡夫の姫君だと侍従が嘘をついている)にもものし
給ひし人は、これにものし給ふ宰相の君(注―某宰相の娘で、両親なども亡くな
り、気の毒な様子だと聞いて、音羽での我身姫の寂しさを紛らわすために、尼上に引き
取られている)のひとつ腹に侍りき。そのゆかり時々なむまかり通ひし。この
春のことにや侍りけむ、二宮のたづねおはしまして、(我身姫ヲ)せちに誘は
せ給ひけるを、いとわびしきことに思ひ悩みて、行方なく失せにけると聞き
侍りしかば、今は仲絶えてなむ侍る」(以上、2・上・七〇)

と三位中将が疑念をさしはさむ余地がないように説明するのである。この
ように我身姫は失踪したことになるわけだが、父関白とともに我身姫(注
―対の姫君のことだが、これ以降も我身姫の呼称で統一する)を訪れた三位中
将は、我身姫と対の姫君との相似に驚愕するばかりである。さらに、我身
姫が「世とともに命にかふばかり思ひまどふ宮(女三宮)の御さまに、い
とようかよひ給へる」(2・上・七三)と女三宮との類似を三位中将は認識
しているわけだが、我身姫に向かってなされた、

⑦「かう見奉り馴れ侍りしより、とりわき思ひ聞こえさせ侍る心は、たぐひなく
こそ頼み聞こえ侍るを、袂のよそながら世のあはれにのみ見馴らし侍る(皇后
宮崩御へ)墨染の色こそ、なほ隔ておかるる心地し侍りけれ」(2・上・八七)

という発言の傍線部のごとく、異母兄妹であることを悲嘆しているのだ。^{注①}

また、我身姫のことを「ましてゆかしう思さぬ時」なくて、「身もいたづらになるばかり思ほしまどへる」(以上、3・上・一四六)二宮は、関白が参内した折、我身姫を盗み出そうとして関白邸に忍び込んで、女房中務の君の手引きで我身姫のもとに闖入し、手込めにしようとする寸前に、「いみじき鬼のやうにまつはれ聞こゆる」(3・上・一五〇)女房の侍従に阻止されるといふ事態が生じたので、亡き皇后宮が二宮への夢告という形で「思ひ草(注―我身姫Ⅱ対の姫君)もとの葉むけは知らずとも結ばむ根とはかけずもあらなむ」(3・上・一五三)の歌を詠んだために、二宮は不審を抱きながらも、我身姫への恋慕が弱まっていくのである。すなわち、我身姫Ⅱ対の姫君は二宮にとって同母兄妹となるので、結婚もしくは情交は禁忌であり、二人の情交は土壇場で回避されたのだ。

さらに前半部で用いられた我身姫と対の姫君という同一人物のすり換えの手法は、巻末近くで再利用されている。二宮の息子である宮の中将が初瀬詣での途次、故一品宮と類似した女君(注―殿の中将の父故関白と中藤女房との間に生まれた娘)を発見して、それを北の方としたわけだが、我身女院や三条院の崩御というどさくさまぎれの最中、宮の中将は三条院邸から後涼殿中宮との密通によって生まれた姫君を盗み出したのである。その姫君(以下、前の姫宮と称する)は幼少の頃から東宮と一緒に育ってきたものの、突如として失踪してしまう。一旦失踪した姫宮(以下、後の姫君と称する)は宮の中將と北の方との間に生まれた子として、裳着をすませた後、東宮のもとに入内することになり、東宮の視線から「あはれとのみ見給ひし人(前の姫宮)の御さまに人(後の姫君)は覚えたる」(8・下・二〇九)ととらえられ、東宮の後の姫君に対する場面は次のように語られている。

⑧少し静かなりぬるに、二所(注―東宮と後の姫君)御手習などせさせ給ふほど、人など近くさぶらはぬに、あやしう、いかなるにか、あはれと思ひ聞こえし人(前の姫宮)の有様につゆばかりもたがはず似給へるが、いとどあはれになつかしくて」とのたまはするに、……「(前の姫宮ト)いかなるゆかりなどものし給ひし。皇后宮(注―もとの後涼殿中宮)の姫宮とて、失せ給ひし人は、ただ御さまにたがふところなくなむおはせし」と(東宮ガ)聞こえさせ給ふに、……ほのかなる墨付さへ昔の(前の姫宮ノ)御さまにたがふところなきぞ、なほあやしかりける。(8・下・二〇九)

この記事から前の姫宮Ⅱ後の姫君ということになるわけだが、我身姫が失踪して対の姫君になり代わったのと同様なからくりであったのだ。巻二で用いられた手法が物語も終焉に近い部分で再度用いられたのであって、首尾照応しているといえよう。^{注②}すなわち、これは『源氏物語』取りを模倣した、いわば『我身にたどる姫君』取りであり、密通によって生まれた姫君(姫宮)を一旦失踪させて、同じ姫君を帝(東宮)と結婚させているのであって、同一作品内でその手法が再生産されているという点に注目しておくべきだろう。

そのうえ、この手法が『我身にたどる姫君』の前半と巻末の部分で用いられているのは、次元を異にしてはいるものの、巻三において三位中將と結婚した女四宮の三位中將の〈性〉を管理しようとする記述が、巻五での前斎宮のそれに影響を及ぼしているのと同様であり、^{注③}『我身にたどる姫君』で用いられた手法が再度用いられているところに、この作品の特性を見ることができよう。

やはり、『我身にたどる姫君』の大きな問題は同一の姫君(姫宮)を別

の姫君に仕立ててすり換えることであると考えられるわけだが、それと極めて近似する〈交換〉に関して一言触れておくことにする。^{注④}『堤中納言物語』に所収されている『思はぬ方にとまりする少将』の男女交換は偶発的な出来事であったのに対して、兄妹の男女交換を行なって、女大将を入内させて中宮に栄達させる『とりかへばや』、女大将を死去させて、女大将時代に発見した男君に女大将の代わりをさせ、その女大将をあらかじめ設定されていた幻の姫君にすり換え、入内させて中宮となる『有明けの別れ』と同様に、前述した『我身にたどる姫君』における我身姫を対の姫君としてすり換え、将来我身帝となる東宮と結婚し、中宮となるという話筋は意図的なものであったのだ。その手法は巻八でも後涼殿中宮が密通して生まれた姫宮のすり換えにも再度利用されているわけだが、『とりかへばや』『有明けの別れ』『我身にたどる姫君』における〈交換〉はすべて意図的になされたものであって、交換された姫君は中宮に至るといふ共通性を持っているのであり、『思はぬ方にとまりする少将』とは明らかに異質なものである。それゆえに、男女交換という意図的な手法を主軸に据えた『とりかへばや』という作品を看過すべきではなからう。さらに、同一人物を別人に仕立てた『我身にたどる姫君』においては〈性〉の〈交換〉を伴わないすり換えという手法が提示されたのであり、それは新たな装置であって、今まで以上にその手法を重視せねばなるまい。

二

『我身にたどる姫君』は自身の出自に関して懊悩している我身姫のことから起筆されているわけだが、その我身姫が懊悩する原点は母皇后宮の密通にあると考えられる。皇后宮崩御前後の記事には『源氏物語』からの引

用を指摘することができると考えられるので、それらを取り上げて、『源氏物語』引用の意味を探っていくことにする。

我身姫への三位中将や二宮の接近、特に後者の接近によって、皇后宮が心労を重ねた結果、里下りをするようになったが、水尾帝の様子は、

⑨上は、かぎりありて（皇后宮トノ別レヲ）え惜しみはてさせ給はず、（退出ノ）
御暇許されても、またひきかへし、ただかうながらかぎりの御さまをも見む
とのみ、くれまどはせ給ふに、……（1・上・四七）

と語られている。一方、桐壺更衣が病のために退出する直前の描写には、

⑩（桐壺更衣ハ）息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと
苦しげにたゆげなれば、かくながら、^①ともかくもならむを御覽じはてむと（桐
壺帝ハ）思しめすに、……（桐壺巻）

とあるごとく、桐壺帝は桐壺更衣が宮中で死去してもかまわないという禁忌を犯すことさえ問題にしていないう点からすると、桐壺帝は更衣の最期を見とりたいとまで考えているのであって、そこに桐壺帝の更衣に対する強烈な恋慕を看過すべきではなからう。だからこそ、水尾帝の心中が語られるのに際して、傍線部①の影響を受けて①の表現となって現出したのだといえよう。

また、病床に臥している皇后宮は見舞いに訪れた関白に対して、

⑪「いとかたじけなき御とぶらひに、惜しげなき世ながらもかけとどめまほしう
侍るを、むげにかぎりのほどにやと思ふ給へらるる乱りがはしきは、おのづ
から思し許されなむ。年ごろ深く思ふ給へ知るふしづも侍りつるを、言に

出で聞こえさせむに、なかなか浅くなりぬべきに、思ひこめてすぐし侍りつるも、何ごとにかは思ひ知るとも御覽せられむと、思ひ給ふるになむ。かひなき命もいとくちをしよう」と、宣旨の君して伝へ聞こえ給ふ。(1・上・四九)と語っているように、傍線部⑩には感謝の意が表明されている。さらに、皇后宮は続けて関白に、

⑫「かつはかやうにて見聞こえさせるも、誰が御心ざしとは思ふ給へ知らねば、かひなき身の侍らざらむ後を聞こえさせむに、かたはらいたきすぢに侍れど、東宮(後に嵯峨帝・嵯峨院)の御こと、とり分きてはぐくみ聞こえさせ給へ。世の人に似ぬ御住まひに侍るめれば、いとど見ゆる方も侍らぬを」など、すこし言続けて聞こゆる御けはひに、(皇后宮ハ)今宵ぞよろづ思し固めつる。(1・上・五〇)

と東宮のことを依頼している。以下の病に臥した藤壺の発言は、

⑬「院(桐壺院)の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべることも多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、いまなむあはれに口惜しくて」と(藤壺ガ)ほのかにのたまはするも(光源氏ニトツテ)ほのぼの聞こゆるに、御答へも聞こえやりたまはず泣きたまふさまいといみじ。(薄雲巻)

と語られている。それには光源氏への感謝の気持ちがおこめられており、傍線部⑭は⑩の影響を蒙っていることになる。さらに、傍線部⑮は東宮のことが依頼されているわけだが、それは⑯で光源氏が桐壺院の遺言に従って、

冷泉帝の世話をしていることに対する藤壺の謝意⑯が続けて語られている点とは異なり、『我身にたどる姫君』においては謝意と東宮への世話の依頼が分断されて語られている点に注意を払っておくべきだろう。ともに密通相手を前にして死にゆく者の発言が語られているわけだが、ここは『源氏物語』との差異を示すために、意図的に分断されたのだろうか。後見と謝意とが緊密に連繫している『源氏物語』に対して、分断することによって皇后宮の関白への比較的長い発言が語られることになり、その結果、臨終を前にしての皇后宮と関白との最後の対面が哀感あふれるように仕立てられたのではないのか。とすれば、これは『源氏物語』に対する〈変奏〉であると考えられよう。

その皇后宮崩御の場面は、

⑭「乱り心地むげにかぎりになり侍りぬるを、いともかたはらいたう」と(皇后宮ハ関白ニ)聞こえ給ふ。ほどもなく消え入るやうにおはしませば、東宮・宮々(注一宮、女三宮。東宮も含めて三人は水尾帝と皇后宮との子)思しまどふさまなのめならむやは。げに露のやうにて消えはてさせ給ひぬれば、あるかぎり心をさまる人もなし。大臣(関白)は空を歩む心地しながら、つれなく御車には奉りぬれど、すべてうつつのこととも思われず、……(1・上・五一)

とあるが、紫上死去の直前直後の件では、

⑮「今は渡らせたまひね。乱り心地いと苦しくなりはべりぬ。言ふかひなくなりけるほどといひながら、いとなめげにはべりや」とて、御几帳ひき寄せて(紫上ガ)臥したまへるさまの、常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、「いかに思さるるにか」とて、宮(明石中宮)は(紫上ノ)御手とらへたてまつり

て、泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば、……（光源氏ハ紫上ノ葬送ニ出カケタトコロ）^⑧空を歩む心地して、人にかかりてぞおはしましけるを、……（御法巻）

と語られている。傍線部③は見舞いに訪れた明石中宮への紫上の発言であり、④は紫上を見つめる光源氏の視線であって、⑤は葬送に赴く光源氏の茫然自失した様子が語られている。それらは『我身にたどる姫君』における傍線部⑥⑦に各々対応していると受け取ることができよう。

とすれば、皇后宮崩御前後の記事は、桐壺更衣・藤壺・紫上の死に関わるそれが利用されているが、そこにはいかなる意味があるのか。前述の三人の女性たちはすべて光源氏に関わっているわけだが、光源氏にとっては原点ともいべき最初の女性である桐壺更衣が崩御に相当する場面の意味を看過すべきではなからう。つまり、光源氏の母親である桐壺更衣が我身姫の母親である皇后宮の崩御直前の描写に類似する点とは無関係ではないのである。さらに、光源氏に該当する人物として皇后宮の密通相手である関白の存在を考えておく必要があるのではないのか。だからこそ、皇后宮の崩御が語られている薄雲巻が引用されたのだ。そのうえ、光源氏にとって最愛の紫上の死の前後が語られている御法巻が皇后宮の崩御の場面で前述のごとく三個所にわたって引用されていることからしても、関白にとって皇后宮が最愛の人であったこととパラレルな関係であると理解されよう。以上の点から、光源氏と我身姫とを冒頭部に登場させているのももちろんのこと、両者の母親もまた冒頭部で語られている意味は大きい。すなわち、『我身にたどる姫君』は単に『源氏物語』を引用しているのではなく、光源氏と我身姫の今後のあり方を決定する存在として登場させられたのが、

桐壺更衣と皇后宮であったのだ。

三

次に、『我身にたどる姫君』とほぼ同時代的な物語作品との影響関係を見ていくことにする。^{注⑤} 作品としては、①『石清水物語』②『吾の衣』③『風に紅葉』との類似性に注目していく。『風葉集』に採歌されていない物語は④ではあるが、それは『我身にたどる姫君』の影響を蒙っている可能性が大きいと理解しておいて差し支えなからう。さらに物語文学ではないが、物語的色彩が濃厚な⑤『とはずがたり』にも触れておくことにする。

①『石清水物語』との類似性

前述したように、二宮が我身姫を恋慕した結果、禁忌である同母兄妹相姦の可能性が想定されるがゆえに、我身姫の亡き母皇后宮が二宮の夢の中に現出して「思ひ草もとの葉むけは知らずとも結ばむ根とはかけずもあらなむ」という歌を詠む。二宮はそれに不審を抱きながらも、我身姫への恋慕は弱まっていくのである。とすれば、故皇后宮の歌が二宮の我身姫への接近を思いとどまらせたのであって、近親相姦という異常性愛が阻止されたのだ。

一方『石清水物語』では、関白の弟左大臣は兵衛督女の宰相の君と情交した結果、彼女は妊娠するわけだが、左大臣北の方の女四君に忌避されたために、常陸守の北の方となっている姉（伯母尼上）の所へ行つて、姫君を出産後、死去する。そのために、姫君は伯母尼君とともに木幡に住むことになる。その木幡で左大臣二男の秋の君が姫君を垣間見て恋着した結果、闖入するが、実は二人が異母兄妹であることを尼君から知らされ、秋の君は断念する。とすれば、異母兄妹による情交は回避されたのだ。『我身に

たどる姫君』における我身姫と二宮という同母兄妹の場合とは異なるものの、いずれにせよ、近親相姦成立の可能性からの逸脱という点では二作品は類似しているといえよう。

さらに、常陸守と鹿島の女との間に生まれた伊予守は姫君を垣間見て思慕していたが、東国の乱制圧後に再度上京した折、姫君との間に情交が成立する。そのことを知らずに父左大臣が姫君の入内を企図していた際に、

⑩九月も末になりぬ。空晴れて、星の光りもあきらかなる夜、殿（左大臣）の御

夢に、玉の冠してをき（注「校註日本文学大系」では「太刀」とする）はいたる

頭白き翁の、ほこさきに墨・筆結ひ付けてささげ持ち、ただ入りに来るを、

あやしと見るほどに、御前の方へ歩み寄りて、この御料にあまたしかけたる

衣どもの中に、姫君の御前のおぼしくて、重なりたるを引き落として、櫛

に付けたる筆して、袂に物を書き付けるを見れば、

「あだ人の重ねし夜半の衣手を雲井にいかか思ひ立つべき

なめげにやあらん」と、さだかに書き付けたるを、「これはたれ人におはする」

と（左大臣ガ）問へば、「八幡大菩薩の御使ひなり」とて、行き過ぎぬると思

すほどに、驚き給ひぬ。

と語られている。この歌は姫君が既に処女ではないから、入内すれば帝に失礼だという内容であったために、左大臣は秋の君と姫君との情交を邪推して、入内を断念するのである。これはいわゆる夢告であるわけだが、『我身にたどる姫君』にも故皇后宮が二宮に対して我身姫との情交を断念するように夢告する件がある。その場合にも歌が用いられており、二つの夢告を比較すると、夢告による近親相姦の阻止と入内のそれという次元の差異はあるものの、ともに〈性〉に関わる事柄であり、その点から考えれ

ば、共通性を内包していることになり、両作品の近似性を考えていくべきではなからうか。

⑪『苔の衣』との類似性

『我身にたどる姫君』において、三位中将の結婚相手として、水尾帝は皇后宮所生で鐘愛する女三宮をと考えていたが、三位中将の伯母に当たる中宮が娘の女四宮との結婚を水尾帝に度々述べたので、水尾帝の心中思惟として、

⑫（水尾帝へ）我れさかしういひとどめむに、（中宮へ）まさにうけひき給はじ、

さりとして、（女四宮ト三位中将トノ結婚話へ）思ひよらぬことにもあらず、これ

（注「女三宮との結婚話」をといはむに（中宮へ）よに許し給はじと思し召せば、

（水尾帝へ）なかなか色にも出ださせ給はず。（2・上・八五）

とあるように、中宮の威力に圧倒されて、水尾帝は女三宮と三位中将との結婚を口外することはしなかったと語られている。水尾帝は中宮の性格を考へて、女四宮降嫁の件を承諾するわけだが、一方、中宮は「ただ春の内にと、はなばたと押し立たせ給」い、三位中将の父関白もそれを歓迎するものの、当の三位中将は「身にしめし身のしろ衣それならであらぬにほひをいかが重ねむ」^{注⑬}（以上、2・上・八六）と詠歌して、女三宮との結婚以外を考へられないと、女四宮との結婚話に懊悩するのである。それに対して、中宮はこの結婚を三月二十日と決めて、その準備にいそむむが、三位中将は懊悩して「起きも上がり給は」ないために、世間では「このこと（注「女四宮との結婚」をのがれむとの御心なり」（以上、2・上・九五）と噂をする。中宮は女四宮との結婚を嫌悪しての三位中将の仮病だとする世間の噂にとまどい、兄関白に対して「臥しながらも（三位中将ガ女四宮ノモ

トニ)おはしそめなむ本意なるべき』と責めのたまはする」(3・上・一〇)ので、三位中将は女三宮への恋慕と女四宮との結婚のはざままで苦渋するのである。そして「五月は人に(結婚ガ)許されぬ月に、(三位中将ハ)いささか心を慰めて、いと弱々しきさまながら、いささかひまありてもてなし給」うので、父関白は安堵する一方、中宮は秋頃にはどうしても女四宮を三位中将と結婚させると公言するものの、「げに世人の思ふさまなどはあぢきなし、かねてけしきもらさじと思しなりて、日々にのたまはせしことも音なく」(以上、3・上・一一六)だったので、三位中将は一息ついたのである。だが、中宮は今までのやり方にこりたのか、次のように語られている。

⑱中宮は、(女四宮ノ結婚ノ件ヲ)けしきにも出ださせ給はず、「姫宮(女四宮)すこし悩ましうし給ふ」とて、二条の宮(注一)中宮の実家)に出でさせ給ふままに、かねてかうともたまはせず、(三位中将ガ)内よりまかて給へる宵のほどに、宮の典侍して御消息あれば、とかく聞こえさせむにも、まことに世語りになりぬべきを、大臣(父関白)ゐたちてかしづき出で給へば、さらにせむ方なくて、(二条の宮へ)参り給ふ(三位中将ノ)心地ぞ、うつつと覚えぬや。

(3・上・一一九)

これによれば、中宮は強行策に転じ、女四宮と三位中将との結婚を成立させるのである。その結果、「身のしろ衣思ひ返さむ方(注一)女三宮)はなけれど、あいなきひとり寝は多く慰みぬるなめり」(3・上・一二〇)と語られている傍線部には、とにかく女四宮との結婚によって、〈性〉の渴きから遠去かった三位中将が戯画的に語られているのだといえよう。

以上のように、三位中将は女四宮との結婚を忌避して体調不良を装って、

延期しようとしたけれども、結局、中宮に押し切られた形で結婚することになる。

これに対して、『苔の衣』では西院の姫君は最初に三条帝が入内を要請し、それが決定した後、以前に一度西院の姫君を垣間見て恋慕していた苔衣の大将は悲観して病臥し、辞世の歌を詠むわけだが、その内容を父関白が知って、西院の姫君の父右大臣に事情を説明した結果、入内は中止となり、苔衣の大将と西院の姫君は結婚することになる。そのことが三条帝の耳に入り、三条帝は苔衣の大将への〈報復〉のつもりで、父冷泉院の意を受けて、院の娘である弘徽殿姫宮の世話役として苔衣の大将を婿にと望む。西院の姫君の父右大臣が死去した後、三条帝は「さもあらば冬ごろただ(苔衣の大将ヲ弘徽殿姫宮ニ)押し譲りてん」と考え、苔衣の大将に対する〈報復〉として弘徽殿姫宮との結婚を推進しようとしたために、そのことを懊惱して西院の姫君は死去する。その後、苔衣の大将は出家しようとする本心を隠して、弘徽殿姫宮との結婚承諾の返答をするわけだが、それは西院の姫君死去の引き金となった三条帝に対する〈報復〉を意味し、そこに三条帝と苔衣の大将との間で展開されたいわば〈報復合戦〉が顕在化されていると考えられる。^{注⑦}

とすれば、両作品における主人公と考えられる三位中将と苔衣の大将は、中宮と三条帝から娘の女四宮と異母妹である弘徽殿姫宮との結婚が強要されたという過程において、両者の類似性を見るのである。

◎『風に紅葉』との類似性

次に、『我身にたどる姫君』が『風に紅葉』に影響を及ぼしたと考えられる点について述べていくことにする。『我身にたどる姫君』において、水尾帝の皇子である二宮の息子宮の中将は三位中将と皇后宮所生の女三宮

との密通によって生まれた三条帝の後涼殿中宮と密通し、また三位中将の息子である殿の中将も宮の中将の妹で、三条帝の麗景殿女御と密通して、各々姫君が誕生しているように、三条帝の後たちとの二例の密通が語られている。光源氏も桐壺帝の藤壺との密通を犯しているが、后との密通は藤壺だけである点から、それと比較しても、『我身にたどる姫君』の場合には宮中世界の乱脈ぶりが増幅されているといえよう。

さて前述したごとく、『風に紅葉』の作中歌が『風葉集』に採歌されていない状況から、『我身にたどる姫君』における后たちとの密通という事柄が影響を及ぼしていると考えられる。その『風に紅葉』では、主人公内大臣をめぐる、梅壺女御と承香殿女御という二人の后の方から先に内大臣に接近し、密通を犯すという〈女すすみ〉の状態であり、^{注⑧}『我身にたどる姫君』よりも一層后の男(内大臣)への積極性が語られているのである。すなわち、『我身にたどる姫君』の密通が二人の男と二人の后であったのに対して、『風に紅葉』では二人の后を内大臣という一人の男と密通させているのであって、以下に述べるごとく、ある意味では『風に紅葉』における後の密通の方が濃厚に語られているともいえよう。

例えば、梅壺女御の内大臣への恋慕を考えると、内大臣の父の兄である太政大臣北の方との隠れた関係のために、「かく(内大臣が北の方トノ密通ノタメニ)渡り給ふよし(梅壺女御ガ)聞き給ふに、心も心ならず、(宮中ヨリ実家デアル太政大臣邸ニ)急ぎ出で給ひてけり」や、梅壺女御が内大臣との初めての密通の後、別れ際に梅壺女御の方から、「有明のつれなき影に先立ちてまた夕闇の心まどひよ」の歌を詠んだ後に、「(梅壺女御ノ)むせかへり給ふ御気色も、逆さまごととなり」と語られている点からも、〈女すすみ〉の状況が理解できよう。

これらも『石清水物語』と同様、〈性〉に関わる事項に照射しているわけだが、『我身にたどる姫君』と『風に紅葉』とは、〈性〉を前面に展開させた作品であると概略的にいうことは可能だろう。

①『とはすがたり』との類似性

『とはすがたり』の記事は文永八年(一二七二)から始まり、徳治元年(一二三〇六)に擲筆されているが、『我身にたどる姫君』の歌が奇しくも文永八年に成立した『風葉集』に七首採歌されている点から、『我身にたどる姫君』と『とはすがたり』との影響関係が考えられる可能性がある。

三条帝の麗景殿女御が殿の中将与密通した結果、妊娠するわけだが、それを隠して、病気が長引いて実家で療養中である旨を三条帝に報告する。その直後に、

①大將殿(麗景殿女御の兄の宮の中将)も、もの思ひのひまには、(麗景殿女御ノ)

心苦しき御さまを、いかかは差し覗きとぶらひ聞こえ給はざらむ。されど、

ただ「風にあたらぬ」などのみ(麗景殿女御ハ)聞こえなして、厚き御衣引き掛けなどのみし給へれば、(宮の中将ハ)目もとどめ給はず。我ももの思ひにながめ入りて、人の御身のあつかはしきをも知り給はねば、異人よりは心やすし。(5・下・四二)

と語られている。傍線部のように、風に当たらないように厚い着物を身にまとっているから、兄の宮の中将は妹女御の妊娠には気付かないのであり、兄も後涼殿中宮への恋慕で無我夢中であるために、気楽であると女御側の状況が語られており、それは『とはすがたり』の以下の場面と極めて近似している。その『とはすがたり』巻一において、一条は「雪の曙」(西園寺実兼)との密通の結果、彼の子を身ごもったわけだが、二条の面倒を様々

見てくれている叔父善勝寺大納言が見舞に訪れる件は次のように語られている。

⑳御所さま（注―後深草院）へも、「御いたはしければ、御使な賜ひそ」と（侍女タチガ）申したれば、時など取りて御訪れ、かかる心構へ、つひに漏りやせむと、行く末いと恐ろしながら、今日明日は、皆人さと思ひて、善勝寺ぞ、「さてもあるべきかは。医師はいかが申す」など申して、たびたびまうで来たれども、「『ことさら（医師ガ）広ぐるべきこと（注―伝染病）』と申せば、わざと」など言ひて、（二条ハ善勝寺ニ）見参もせず。しひて「おぼつかなく」など（善勝寺ガ）言ふ折は、暗きやうにて、衣の下にていと物も言はねば、まことしく思ひて立ち帰るも、いと恐ろし。さらでの人（注―善勝寺以外の人）は、誰訪ひ来る人もなければ、「雪の曙」ガ添ひ居たるに、その人（雪の曙）はまた、「春日（注―春日神社）に籠りたり」と披露して、代官を籠めて、「人の文などをば、あらまして（代官ガ）返事をばする」など（雪の曙）ガささめくも、いと心苦し。

親しい善勝寺に対しても傍線部のように、二条は現状を隠蔽することによって、事なきを得るのである。とすれば、これは『我身にたどる姫君』の麗景殿女御の様子と同様な状況であって、作者二条が『とはずがたり』を執筆する際に参考にした可能性も考えられよう。もちろん、『とはずがたり』は日記文学と考えられているので、基本的には作者二条の実体験に基づいた事柄が語られているという建前に立っているところから、物語における描写をそのまま模倣したとは考えにくいものの、作者二条の眼に何らかの形で『我身にたどる姫君』に触れた可能性もあるということだけは指摘しておきたい。

* * *
『我身にたどる姫君』の本文は、中世王朝物語全集により、算用数字は巻、上・下は分冊記号、漢数字は該当ページを示し、『源氏物語』『狭衣物語』『とはずがたり』は新編日本古典文学全集、『石清水物語』は鎌倉時代物語集成、『風に紅葉』は中世王朝物語全集によるが、私に表記の一部を改めた部分がある。

注① 三位中将の叔母に当たる水尾帝中宮所生の女四宮との乗り気ではない結婚話が進む中、三位中将は以前から「夢のなか・幻のつてにも、見ばや聞かばやと、いりもみ給」（1・上・二二）うている故皇后宮腹の女三宮への手引きを中納言の君に強要して、情交に至る。その女三宮は我身姫とは異父姉妹であった。それゆえに三位中将の視線を通して、「（我身姫ハ）ただかの心を尽くす御あたり（注―女三宮）にいみじうかよへる」（3・上・一一七）をはじめとして、我身姫の「ほのかなる御けはひのいとせめてそれ（注―女三宮）かと聞こゆる」（3・上・一三二）とあるように、三位中将の不審が何度も語られている。

② 辛島正雄 『我身にたどる姫君』における二つの女系―対立と融和の〈年代記〉（『中世王朝物語史論』上巻に所収 笠間書院 二〇〇一・5。初出、一九八二・6）、金光桂子 『我身にたどる姫君』巻六の位置付け（京都大学『国文学論叢』第二号 一九九九・6）。

③ 大倉「我身にたどる姫君―女帝と前斎宮―」（『物語文学集攷―平安後期から中世へ―』に所収 新興社 二〇一三・2。初出、二〇〇九・10）。

④ 〈交換〉に関しては、神田龍身「分身、交換の論理―『木幡の時雨』』としかへばや―」（『物語文学、その解体―源氏物語』『宇治十帖』以降』に所収 有精堂 一九九二・9。初出、一九九一・12）に詳しく説かれている。

⑤ 小木喬『鎌倉時代物語の研究』（東宝書房 一九六一・11。後に有精堂より覆刻版 一九八四・6）において、『我身にたどる姫君』の『風葉集』での採

歌状況は巻四までで、巻五以降は一首も入集していないところから、『風葉集』に採られた四巻分の作品が先に成立して、その後巻五以下が書き継がれて八巻の現存本になったと推測しているが、現段階としてはその経緯は不明であるとしかしいようがない。なお、二〇一〇年七月刊の中世王朝物語全集『我が身にたどる姫君・下』の解題（片岡利博執筆）においても、この問題に触れてはいるものの、今後の課題としている。

⑥ この歌は『狭衣物語』（巻二）において、狭衣大将が「いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜の狭衣」が詠んだ歌から影響を受けているわけだが、そこには源氏宮以外には恋慕の対象にはしないという狭衣大将の強い意志が表出されている。三位中将にとって女三宮との密通は生じても、結婚は成立しなかったのであるから、その後は狭衣大将と類似した運命を辿っていく。

⑦ 詳しくは注③大倉前掲書（第二部 七 苔の衣(1)苔衣の大将と兵部卿を中心に）を参照されたい。

⑧ 詳しくは注③大倉前掲書（第二部 二十一〈女すすみ〉の文学史）を参照されたい。

（おおくら ひろし 日本語日本文学科）